

## 里山：その実態の歴史的変遷と現代的表象

湯本貴和（京都大学霊長類研究所）

討議の材料として、里山里海関連の定義についてまとめた。

### 1) 里山概念の変遷

「里山」の語の最古の史料は1661年にさかのぼる。1661年、佐賀藩「山方ニ付テ申渡条々」によるもので、田畠、里山方、山方という土地を示す語の中で、「里山方」という言葉が用いられている（黒田，1990）。1663年加賀藩「改作所旧記」でも、「山廻役」（巡回役）として「奥山廻」と「里山廻」が記述されている（山口，2003）。「里山」が単独で用いられたのは、1759（宝暦9）年、木曾材木奉行補佐格の寺町兵右衛門が筆記した『木曾山雑林』に「村里家居近き山をさして里山と申し候」と記されているのが最初と言われている（所，1980）。また、1905（明治38）年に農商務省山林局が発行した『單寧（たんニン）材料及び櫛（かしわ）樹林』の中では、「深山」に対置させて「里山」が使われている。この言葉は、その後1970年代に森林生態学者の四手井綱英によって、村里に近いヤマ（農用林）をさす指す言葉として提案された。つまり、里山とはもともとは「農用林や薪炭林として利用されていた林」を意味する。なお、集落に近い農用林野に対しては、地方によって様々な呼び方が存在し、里山のほかには「四壁林、地続山、里林など」が知られている（犬井，2002）。つまり、このような林は、落ち葉や下草が堆肥として畑に還元され、薪や炭が燃料として家屋で使用され、あるいは食用となるきのこや山菜の採取得られるなど、周囲の土地利用と密接に関係していた林である。

しかし、身近な農村景観の減少に伴ってそうした自然保全への意識が高まるようになると、この言葉がもともとの意味を超えて、より広い意味で一般市民を含めて使われるようになった。また学術的にも、農用林、草地、農地、集落などの農村景観要素の相互関係の重要性が認識されるようになり、農用林だけでなくこれらの景観要素をセットで、つまりランドスケープとして理解していくことがより重視されるようになった。

また、里山の土地利用は、林地の定期的な伐採と回復、あるいは農業活動、水路やため池の管理など、人の手によって管理され維持されてきた。さらに、このような長年の自然とのかかわりは、伝統的な食文化を生み、人々の感性を育み、あるいは結果として良好な景観を形成しているなど、地域の文化的な基

盤の形成に寄与してきたものである。

里山に対する関心の高まりのなかで、生物多様性の保全との関係性が強調されている。主に 1990 年代以降の生態学的研究により、里山のランドスケープにおける構造的特徴や人為的攪乱の存在が、生物多様性と大きな関係性があることが示されている。里山が多様な土地利用のモザイク構造をなしていることは、それぞれに異なる動植物が生息・生育することを可能にし、全体として高い生物多様性を実現する。また、複数の異質な生息場所を必要とする動物種については、適切な空間スケールでの生息地のモザイクはこの要求にこたえることができる（鷲谷，2001）。さらに、林地の定期的な伐採などの里山における適度な人為的な攪乱が氷期の遺存種の生育環境をもたらしていることが示され、里山における適切な管理の重要性が認識されている。

このような農村景観をまとめて「里地」と呼び、林としての「里山」と区別するという提案もある（武内，2001）。また、狭義の里山を「里山林」とし、多様な農村景観要素のセットとしての広義の里山を「里やま」と区別している文献もある（石井，2005）。表 1 にこれまでの主な定義の変遷をまとめた。養父（2009a）は里地里山の定義のなかで、海岸部や湖沼の近傍では「里海」や「里湖」がその一部として加わるとしている。

表 1 里山に関する主な記述・定義の変遷

里山の定義	農地、水路など農的 土地利用		集落を含む景観・ 複合的な土地利用
	森林・雑 木林		
農地につづく森林・たやすく利用できる森林地帯（四手井，1974）	○		
森林、集落、田畑がモザイク状になって、農業と一体となった地帯（高橋，1986）	○	○	○
焼畑農耕の場、あるいは薪炭や刈敷採集の場として、人の働きかけとわかちがたく結びついてきた雑木林は、里山林として「原風景」ともいうべきわが国独自の農村風景を形成してきた。同時にそれは現在の照葉樹林がまだ落葉樹林に覆われていた時代の生き残り（遺存種）であるカタクリ、カンアオイ、ミドリシジミ類、ギフチョウなどの植物、動物の生活でもあった（守山，1988）	○	○	
林やそれに隣接する水田や畑と畦、ため池や用水路などがセットになった自然（田端，1997）	○	○	

日本列島の丘陵地や氾濫原の多様な自然の環境要素にヒトが手を加えて整備し維持してきた伝統的な農業生態系（鷺谷，1999）	○	○	○
手つかずの自然ではなく、人が目的をもって手を加えることで維持されてきた自然（ミュージアムパーク茨城県自然博物館，2001）	○	○	
日常生活および自給的な農業や伝統的な産業のため、地域住民が入り込み、資源として利用し、攪乱することで維持されてきた、森林を中心にしたランドスケープ（大住・深町，2001）。	○	○	○
里山は、現代ではかなりの多義性を持った言葉であるが、それが人間の手によって管理された自然、すなわち「二次的自然」をおもな構成要素としている点は大多数の認めるところであろう。（中略）しかし、里山にいかなる二次的自然が含まれるかは、人によって解釈が異なる。（中略）二次林、草地、農地、集落は、いわばセットとなって伝統的農村景観を形成していた。その意味で、これらが一体としてとらえられるべきものであることは間違いない（武内，2001）	○	○	○
関東平野のように広大な平地がひろがっているところでは、里山は平地林からなり、山間地では人里に近い山林が里山なのである（犬井，2002）	○		
里山生態系は、（中略）境界のきわめて曖昧な概念であり、森林、水田、さらには草地などとそこに生息する動物のセットと言った方が実態に近い。（中略）森林や草地を里山と漠然と称するのではなく、それについては二次林（あるいは雑木林）や草地というように具体的に指示し、里山は人間とそれを取り巻く自然が相互作用するシステムとして広く捉えることが望ましい（広木，2002）	○	○	○
里山は、狭義には薪炭林あるいは農用林のことであるが、広義には水田やため池、水路からなる「稲作水系」や畑地、果樹園などの農耕地、採草地、集落、社寺林や屋敷林、植林地などの農村の景観全体、都市周辺の残存林などを含めることも多い（石井，2005）	○	○	○
里地里山は、長い歴史の中でさまざまな人間の働きかけを通じて特有の自然環境が形成されてきた地域で、集落を取り巻く二次林と人工林、農地、ため池、草原などで構成される地域概念（第三次生物多様性国家戦略，2007）	○	○	○
Japan's <i>satoyama</i> is “the characteristic managed landscapes which traditionally balanced productive agriculture with sustainable use of natural resources.” (GBO3, 2009)	○	○	○
里地里山は、「水と空気、土、カヤ場や雑木林から屋敷、納屋、牛馬小屋、畑、果樹園、竹林、植林、溜池、小川、水田、土手、畦など、一連の環境要素が一	○	○	○

つながりになった暮らしの場」である。海岸部や湖沼の近傍ではその一部に「里海」や「里湖」が加わる。(養父, 2009)			
--	--	--	--

## 2) 里海概念の変遷

歴史的には、1842年佐倉藩「佐倉御領海岸検地記録」では、東京湾の「海付き村」の空間構造に歩行（かち）、瀬付、沖という語が用いられ、その水産資源の利用・管理の状況が記録されている（高橋, 1982）。

「里海」の概念は、「人の手を加えることによって生物生産性と生物多様性が高くなった沿岸海域」という意味で、1998年に柳哲雄によって提唱された（柳, 1998, 2005; Yanagi (2007)）。特に、瀬戸内海沿岸において、人間と海の見直しという市民活動が端緒となった。

また、中村（2003）は、「海域の里海とともにその周辺の漁村および人の生活とかかわる海辺の自然環境のセット」を「里うみ」として位置づけた。さらに、これを里山と一体化させて、「集落を中心に人が高度制御の田畑から森林・海の無制御な空間までの人・自然・文化の一体的まとまりのモザイクセット」として「里山海」（中村, 2006a,b）という概念を提示している。また、最近では京都大学フィールド科学教育研究センター（2007）において「森里海連環学」講座を開設し、森から海までに及ぶ範囲を含めた統合的管理の構築を目指している。ここでは、「流域や河口域に集中する人間を中心とした生態系」として「里」を捉えている。

里海は、国際的には Integrated coastal zone management (ICM: 統合的沿岸域管理) や Coastal ecosystem management (沿岸域生態系管理) と重なる意味合いを有する。その一方で、アジアを中心とした人々には、Sato-Umi は西洋科学ではほとんど顧みられることがなかった伝統文化や精神的な側面を重視するということで、注目されている。

里海としての瀬戸内海の成り立ちは、里山と深い関連性がある。かつて瀬戸内海の代表的な風景として謳われた白砂青松の海岸の形成には、製塩業が大量に消費した燃料のため集水域の森林が伐採され、その結果生じた花崗岩質のはげ山から生じたマサ土（風化花崗岩）の流出が大きく関係している。マサ土の砂浜には痩せた土地に強い松が生い茂った。全国的に名高い広島湾のカキ養殖やカキ筏が連なる風景も、太田川流域の里山の恵みを受けている。里山、森林

管理のあり方が、河川の水質、流域に直接的に反映され、これが海域の環境、カキの餌であるプランクトンの生産に影響するからである。魚介類、塩を含む里山の恵みは、内陸でも利用されてきたので、里山と里海の間には双方の産物を介した相互関係がある。

里海はその言葉自体まだ新しく、その意味合いも変化しつつある。里海は、当初の「かつてあった状態」を示す言葉というより、最近ではむしろ「新たに造りだすべき人と海との望ましい関係性」を示すに変わりつつある。最近では、日本の海の新たな再生方策として、里海の創生が、第三次生物多様性国家戦略、21世紀環境立国戦略などの国レベルの方針にも記述されるようになり、この言葉は一般市民の間にも徐々に浸透しつつある。

### 3) 里山里海 JSSA における里山里海の定義

このように、里山や里海をめぐる定義には、各時点での事業の目的や社会的背景によって多様なものである。それらの経緯を考慮しつつ、里山里海 JSSA では「里山・里海」について、以下に示すような統一的な定義を設けるための検討を行った。検討の過程においては、里山・里海の特徴を強調しつつも、シンプルかつ既往の定義をできるだけ多く網羅できる内容になるよう配慮した。そこでは、里山・里海とは「里山・里海ランドスケープとは、動的な空間モザイクであり、人間の福利に資する様々な生態系サービスを産み出す複合的な社会・生態システムである」と定義する。そして、里山と里海は以下のように特徴づけられる。

- ・里山は林地、草地、農地、放牧地、ため池、灌漑用水路など様々な陸域、水域の双方を含む生態系のモザイクである。
- ・里海は海浜や磯、干潟、藻場、サンゴ礁、などの様々な陸域、水域の双方を含む生態系のモザイクである。
- ・里山・里海とは、伝統的知識と科学が融合した自然資源管理システムであり、そのシステムの構造やパターン、空間スケール等は各地域の社会と生態的な状況に応じて異なる。
- ・生物多様性は、里山・里海ランドスケープのリジリエンス（回復力）と多様な機能発揮のための主要素である。

里山のモザイクが平面的な土地利用のモザイクを中心とするのに対し、里海

のモザイクでは沿岸海域の水深に応じた多様な生態系や漁場の立体的なモザイク構造が含まれることが特徴的である。

#### 引用文献

- 犬井正 (2002) 里山と人の履歴. 361pp., 新思索社.
- 石井実 (2005) 里やま自然の成り立ち (日本自然保護協会編, 生態学からみた里やまの自然と保護. 242pp., 講談社), pp.1-6.
- 大住克博・深町加津枝 (2001) 里山を考えるためのメモ. 林業技術 No.707, pp.12-15.
- 黒田迪夫 (1990) 佐賀藩の林野制度. (佐賀県林業史編さん委員会編, 佐賀県林業史. 1204pp., 佐賀県).
- 四手井綱英 (1974) もりやはやし. 206pp., 中央公論新社.
- 高橋在久 (1982) 東京湾水土記. 280pp., 未来社.
- 武内和彦 (2001) 二次的自然としての里地・里山 (武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史 (2001) 里山の環境学. 257pp., 東京大学出版会), pp.1-9.
- 田端英雄編著 (1997) 里山の自然. 199pp., 保育社.
- 所三男 (1980) 近世林業史の研究. 887pp., 吉川弘文館.
- 中村俊彦 (2003). 「海と人のかかわりの回復と今後の展望 —江戸の里うみへ Back to the future—」『月刊海洋』 35(7): 483-487.
- 中村俊彦. 2006a. 里やま・里うみの景相生態学と構築環境デザイン. 建築雑誌 121 巻 1549 号 : 24-27.
- 中村俊彦. 2006b. 里山海の生態系と日本の Sustainability. 応用科学学会誌 20(1) : 11-16.
- 広木詔三編 (2002) 里山の生態学—その成り立ちと保全のあり方. 333pp., 名古屋大学出版会.
- ミュージアムパーク茨城県自然博物館 (2001) 人と自然のコミュニティスペース「里山」. 35pp., ミュージアムパーク茨城県自然博物館.
- 守山弘 (1988) 自然を守るとはどういうことか. 260pp., 農山漁村文化協会.
- 柳哲雄 (1998) 瀬戸内海の自然と環境, 244pp., 瀬戸内海環境保全協会.
- 柳哲雄 (2005) 瀬戸内海—里海学入門, 69pp., 瀬戸内海環境保全協会.
- Yanagi, T. (2007) *Sato-Umi: A new concept for coastal sea management.*

TERRAPUB, 86pp, Tokyo

養父志乃夫 (2009) 里地里山文化論 上 循環型社会の基層と形成, 215pp., 農山漁村文化協会, 東京.

山口隆治 (2003) 加賀藩林野制度の研究. 500pp., 法政大学出版局.

鷺谷いづみ (2001) 保全生態学からみた里地自然. (武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史 (2001) 里山の環境学. 257pp., 東京大学出版会), pp. 9-18.